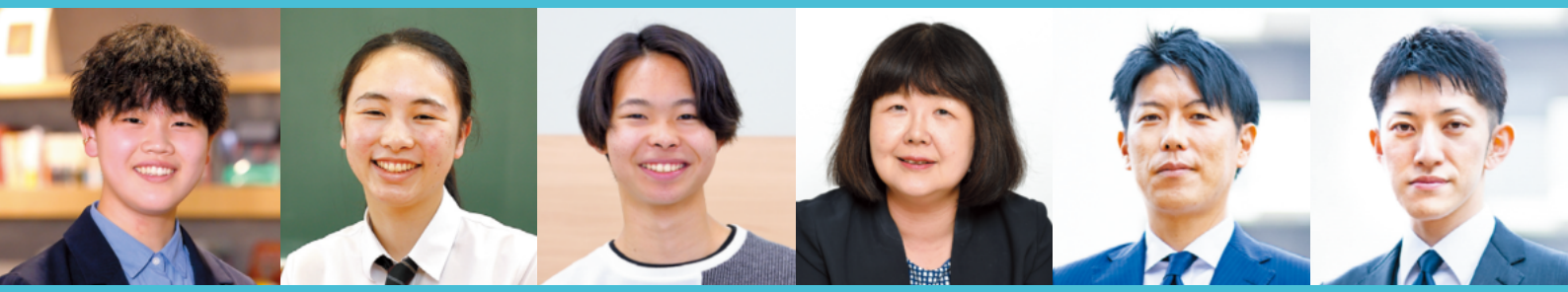
創刊400号記念特集



# 共に創る
# 教育の未来

『VIEW next』高校版は、今号で創刊400号を迎えた。節目となる本号の特集では、未来の社会の担い手である若者が創りたいと思っている社会と、そうした社会を実現していくために必要な学校教育について、学校内外の多様な人々が集い、語り合った。変化が激しく、予測困難なこれからの社会をよりよいものとし、一人ひとりが幸せを感じながら生きていくためには、学校教育はどうあるとよいのか。教育にかかわる読者とともに考え、未来を創る一歩を踏み出したい。

P.4 Introduction 社会と学校教育のこれまでとこれから

若者との対話から描く、これからの学校教育

P.6 対話を通して考える
私たちが創りたい社会、これからの教育

P.8 秋田先生との対話1
一人ひとりが好きなことに没頭し、学びを深められる学校に
千葉県・私立渋谷教育学園幕張中学校高校卒業 立崎乃衣

P.10 秋田先生との対話2
地域に飛び出し、時間割を超えた学びを深める学校に
福島県立福島高校3年生 伊関佳純

P.12 秋田先生との対話3
互いの個性を尊重し、失敗してもやり直せる学校に
内閣府認定特区高等学校 明蓬館高校 岐阜SNEC3年生 清水陸志

3人の若者と秋田喜代美先生（学習院大学文学部教授、中央教育審議会委員）が対話

P.14 若者と語り合って
一人ひとりのよさを認める学校が、誰もが幸福な社会を創る
学習院大学文学部教授、中央教育審議会委員 秋田喜代美

P.16 若者の言葉に耳を傾けて
多様な生き方を尊重し合える社会の実現に向けて教師がすべきこと
静岡県立小山高校 美那川雄一 ／ 静岡県立静岡東高校 神谷隼基

これからの学校教育の実現に向けた課題

対話から見えてきた、これからの学校教育の課題を深める

P.20 課題1 学び続ける人材の育成
自由に学び、没頭する中で、「探究し続ける人」が育つ
東京大学文科三類1年生（長崎県立諫早高校卒業）岸 ふみ
長崎県立諫早高校 後田康蔵
國學院大學 人間開発学部初等教育学科 教授 田村 学

P.24 課題2 地域・家庭とともに生徒を育てる
組織的な地域連携の中で生徒を育み、よりよい学校を創る
―静岡県・富士市立高校の実践から考える―

P.28 課題3 教師が生き生きと働き続けられる環境づくり
―実践事例と識者の提言から考える、「働き方改革」のあり方―
同僚性を高め、働きやすく、働きがいもある学校に
実践事例 宮城県角田高校と宮城県教育庁の取り組み
識者の提言 愛媛大学大学院教育学研究科 教授 露口健司

P.32 Message
これからの学校のために私たちができること―
生徒一人ひとりの「学びたい！」があふれ出す未来の教育を、先生方とともに創り出す
株式会社ベネッセコーポレーション 学校カンパニー長 田村隆憲

Introduction

# 社会と学校教育の
# これまでとこれから

1974年に『進研ニュース』として創刊以来、『VIEW21』、『VIEW next』と、
半世紀近い歴史を積み重ねてきた本誌。
社会と学校教育のこれまでを本誌の歩みとともに振り返り、これからを見通す。

## 社会の動き・主な出来事

### 1990～

**バブル経済の崩壊から「失われた10年」へ**

バブル経済が崩壊し、山一證券などの大手金融機関が経営破綻。就職氷河期が到来。

- 阪神・淡路大震災（95年）
- Windows95 発売（95年）
- 日本、サッカーW杯初出場（98年）

サッカーW杯初出場を決めた日本代表。

### 1980～

**東西冷戦終結。日本はバブル景気に突入**

都市圏の地価が急騰。携帯電話が実用化し、家庭用ゲーム機も誕生した。

- パーソナルコンピューター（PC）普及
- スペースシャトル打ち上げ（81年）
- 東西冷戦の終結（89年）

東西冷戦の象徴、「ベルリンの壁」が崩壊。

### 1970～

**高度経済成長期から、安定成長期へと移行**

10年以上続いた高度経済成長が終わる。成長の弊害として公害問題が深刻化。

- オイルショック（73年、79年）
- 新東京国際空港が開港（78年）
- インベーダーゲームの流行（78年）

トイレットペーパーの買いだめをする人々。

## 学校教育の動き・本誌の歩み

**社会状況が激しく変化し、進路指導の重要性が高まる**

国内の経済が冷え込む中で、ニート、フリーターの増加が社会問題に。また、子どもの学力低下が表面化。

- 学習指導要領改訂「生きる力」の育成、「総合的な学習の時間」の新設
- 大学入試センター試験開始

『進研ニュース』から『進研ニュースＶＩＥＷ21』へ名称変更。学校現場とともに、これからの進路指導のあり方を考える編集方針へ。

**臨時教育審議会が個性重視の改革方針を示す**

校内暴力、不登校、いじめなどが社会問題となる中で、臨時教育審議会が設置される。

- 臨時教育審議会の答申で、個性重視、生涯学習体系への移行、国際化・情報化など時代の変化への対応が提言された

Ｂ５判の情報誌に刷新。記事の中心は大学入試に関する情報。センター試験導入の直前期は、ほぼ毎号、大学入試の最新情報を提供した。

**「進学率」が上昇 知識は「量」から「質」へ**

大学・短大進学率は３割を超え、高校進学率が９割を超えた。一方、「詰め込み教育」や「落ちこぼれ」が社会問題化。

- 学習指導要領改訂「ゆとりある充実した学校生活の実現」へ
- 共通一次試験開始

進研模試のデータを盛り込みながら、大学入試を中心とする教育情報を掲載したタブロイド紙、「進研ニュース」が創刊。

## 予測が困難な時代だからこそ、未来を生きる若者と考えたい

本誌は、『進研ニュース』、『VIEW 21』、『VIEW next』と名称を改めながら、学校現場とともに半世紀という時間を歩んできた。その間、私たちが生きる社会は大きく変化したが、その変化の中身や方向を予測することは、時代とともに一層困難になってきている。

そうした中で、学校教育が生徒に身につけさせることも確実に変わってきており、近年では、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力を始めとする資質・能力の育成が推進されている。

「人を育てる」という大切な役割を担う学校とともに歩んできた本誌だが、創刊400号を迎えた今号では、予測が困難な時代だからこそ、未来を生きる若者がどのような社会を創りたいと思っているのかに耳を傾けるとともに、そうした社会を実現するためには、これからの高校教育はどうあるとよいのか、識者や現場の教師も加わり、考えていく。まずは次ページからの若者の声に耳を傾けられたい。

## 2000～

### 世界同時不況。格差社会が問題に

温室効果ガスの削減が世界的な課題となり、国内では格差社会が深刻化。

- アメリカ同時多発テロ事件（01年）
- リーマンショック（08年）
- SNSが普及

iPhoneを発表するスティーブ・ジョブズ氏。

### 新世紀を生き抜く「確かな学力」の育成

「確かな学力」、「学力向上」が強くうたわれ、学習指導要領の「はどめ規定」が緩和された。

- 英語教育の充実
- スーパーサイエンスハイスクール事業開始

現場の教師が「生徒の自立」をテーマに対談。

## 2010～

### スマートフォン社会到来。経済、暮らしが変化

幅広い年代で、インターネットの利用が拡大。YouTuberが注目を集める。

- 東日本大震災（11年）
- スマートフォンが普及
- 日本、人口減少社会へ

2012年に開業した東京スカイツリー。

### 育成を目指す資質・能力を踏まえた教育へ

「生きる力」の育成を目指し、資質・能力が3つの柱で整理された。

- 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善
- カリキュラム・マネジメントの推進

識者による「カリキュラム・マネジメント」の解説。

## 2020～

### コロナ禍で始まった予測が困難な時代

コロナ禍が世界に広がる。東京オリンピック・パラリンピックが開催。

- 新型コロナウイルス感染拡大（20年）
- ロシアがウクライナに侵攻（22年）
- 成年年齢18歳に引き下げ（22年）

東京五輪の開会式で入場する日本選手。

### 変化を受け止め、未来を創る力の育成へ

新型コロナウイルスの感染拡大による臨時休業と、その中でのICT活用など、学び方が大きく変化。

- 大学入学共通テスト開始
- 1人1台端末の整備

「主体的・対話的で深い学び」を実践例から追究。

## 2023～

### 大きく変わると考えられている私たちの社会

- 2050年には、日本の人口は約1億人まで減少し、生産年齢人口（15歳から64歳）が、現在のおよそ7400万人から5300万人（70%相当）にまで減少する見込み。
- デジタル化や脱炭素化が進む中、社会からは「問題発見力」「的確な予測」「革新性」が需要の高い能力として求められる可能性。

※年表内写真提供：ロイター＝共同、共同通信社　※年表外の街並み遠景写真提供：iStock
※主な参考資料：文部科学省「これまでの学習指導要領の変遷」、中央教育審議会「次期教育振興基本計画について（答申）参考資料・データ集」

# 私たちが創りたい社会、これからの教育

未来を担う若者たちは、どのような社会を創りたいと思っているのだろうか。
そして、彼らが望む社会を実現する上で、学校教育はどうあるとよいのか。
3人の若者が、それぞれの創りたい社会と、教育に望むことについて、識者と語り合った。
さらに、次代の高校現場を牽引する若手・中堅教師が、これからの教育のあり方を、話し合った。

## 創りたい社会と教育への思いを語った3人の若者

千葉県・私立渋谷教育学園
幕張中学校高校卒業
**立崎乃衣**（たつざきのい）

福島県立
福島高校3年生
**伊関佳純**（いせきかすみ）

内閣府認定特区高等学校
明蓬館（めいほうかん）高校 岐阜SNEC 3年生
**清水陸志**（りくし）

## 若者たちの言葉に耳を傾け、教育のこれからを考えた3人の教育者

学習院大学文学部教授、
中央教育審議会委員
**秋田喜代美**

3人の若者との対話▶▶▶ P.8

静岡県立小山（おやま）高校
**美那川雄一**（みながわ）

静岡県立静岡東高校
**神谷隼基**（かみやとしき）

対談▶▶▶ P.16

# 若者たちの紹介――未来を担う3人が歩んできた道のり

## エンジニア思考でコロナ禍に向き合い、「世界を変える10人」に選出

立崎乃衣（たつざきのい）

小学3年生からロボット製作に没頭し、中学1年生からは中高生で構成されるロボコンチームに参加。世界大会への参加を重ねてきたが、2020年3月から続いたコロナ禍においては、活動や登校ができない日々が続いた。そこで、ロボット製作で培った知見を生かして医療従事者を支援しようと、自宅でフェイスシールドの製作に着手。医療機関と直接やり取りをしたり、チームの仲間にも参画を働きかけたりすることで、6か月間で2200個を寄付した（詳細は、『VIEW next』高校版2023年4月号で紹介）。

その活動が評価され、20年10月に、世界有数のパソコンメーカーから「世界を変える10人の若い女性」の1人に、日本人として唯一選出された。また、21年には、優秀な若者の研究活動などを支援する孫正義育英財団の第5期生に選ばれた。現在は、小中高生に理科教育の機会を提供する国内企業で働きながら、24年秋からの海外大学進学を目指している。

## 校内の有志でチームを組み、地域住民と協働しながら、高校生主体の防災教育に取り組む

伊関佳純（いせきかずみ）

福島県に生まれながらも防災に関心を持つことがなかったが、高校1年生の時に参加した、全国の高校生が防災について考えるワークショップで、自分と同じ高校生が、地域の防災のためにできることに取り組んでいることを知った。それをきっかけに防災に関心を持ち、学校の防災教育をよりよいものにしたいと考えるようになったことから、同じ思いを持つ友人と「防災と教育を考える会」を立ち上げた。

同会では、学校の近隣の住民とオリジナルの防災ゲームに取り組む中で「自助・共助・公助」について考えを深めたり、地域住民との町歩きを基に防災計画や防災マップを作成したりした。また、災害発生時に避難所となる校舎を高校生が主体的に運営できるよう、地域のコミュニティーづくりに着目。防災訓練の充実にとどまらず、普段から高校が地域のハブとなり、高校生が多世代と交流して人々をつなぐ役割を果たすことで、みんなが助け合える地域を創りたいと考え、次の活動を模索している。

## 周囲の期待に応えてきた自分が、病気を契機に「自分」に目を向け、新たな目標を見つける

清水陸志（りくし）

中学校までは、勉強にもスポーツにも一生懸命取り組む模範的な生徒だったが、3年生のある日の朝、突然起きられなくなり、燃え尽き症候群と診断された。登校できない日が多くなり、周囲からは「怠けだ」と言われることもあった。それでも受験勉強を続け、高校に合格。その後、自律神経の不調によって脳への血流が低下し、頭痛や立ちくらみ、失神などが起きる起立性調節障害を患っていることが判明した。

高校では心機一転頑張りたいという本人の意思に反して、入学1か月後には再び登校できなくなり、退学を決意。新たに入学したのが、発達に課題を持つ高校生が特別支援つきの普通教育を受けることができる通信制高校だった。無理のないペースで登校を続ける中、支援員や心理士のサポートもあって次第に体調も回復。自分の病気をきっかけに心理学に興味を持ち、「完璧主義」や「理想からの減点主義」などの自分の思考の癖も自覚した。今後は大学に進学し、心理学を中心に学びを続けたいと考えている。

**次ページからは、3人の若者が秋田先生と、創りたい社会とこれからの教育について語り合う**

立崎さんとの対話……P.8
伊関さんとの対話……P.10
清水さんとの対話……P.12

対話 1

# 一人ひとりが好きなことに没頭し、学びを深められる学校に

学習院大学教授、
中央教育審議会委員
**秋田喜代美**

×

千葉県・私立渋谷教育学園
幕張中学校高校卒業
**立崎乃衣**（たつざきのい）

ロボット製作を通して身につけたエンジニア思考を基に、高校時代に社会貢献を果たした立崎さん。自分の好きなことに没頭することで大きく成長してきた経験を踏まえて、これから創りたい社会と教育に望むことを、秋田先生と語り合った。

〈立崎さんのこれまでの歩みはP.7で紹介〉

## 身近な人々に認められる中、自己肯定感を高めていった

**立崎**　私が創りたい社会は、「自分にはこれができる。だったら、これもできるかも」と、誰もが自分の可能性に希望を抱くことができる社会です。みんなが「自分にはこれができるかも」と前向きになれれば、きっと社会変革のスピードも加速すると思うんです。みんなが前向きになるためには、好きなことに没頭する経験が一人ひとりに必要だと考えます。私は、小学生の時にロボット製作を始めて以来、両親やチームのメンバー、メンターの大人の方から、たくさんのサポートを受けてきました。中学校、高校では、ロボットコンテストに出るため、授業に出られなかったことがありましたが、そのような時も先生方は私を応援してくれました。ロボット製作に没頭できたおかげで、私は、社会問題の解決を先導するリーダーでもあるエンジニアになるという、将来の目標を決めることができました。

**秋田**　周囲の人たちに、好きなことに没頭する自分を見守ってもらい、「今のあなたは素敵だよ」と認められることによって、自分らしさに対して確かな自信が持てたのですね。立崎さんの経験が示してくれている通り、興味があることを探究し続けるためには、周囲の支えが重要だと思います。

**立崎**　私は中学生の時から、担任の先生に毎日日記を提出していました。日記にはロボットのことだけでなく、日々の様々な出来事なども書きましたが、どの先生も、私を応援する言葉をかけてくれるとともに、先生自身の人生経験を踏まえたアドバイスやヒントを与えてくれました。信頼できる大人とのやり取りを通して、私は自己肯定感を高め、人生の哲学を学ぶことができたと思っています。

**秋田**　生徒が夢中になっていることや思ったこと、感じたことなどを、先生方は日記を通して丸ごと受け止め、人生の先輩として、先生自身の経験を踏まえた言葉で応答してくれたんですね。深い信頼関係を築いていく見本のような関係だと思いました。

## 学校の外で学ぶことで、学校の学びの価値に気づく

**立崎**　これからの学校には、授業だけでなく、企業や大学と協力した広い学びを生徒に体験させてほしいと思います。私が所属したチームには、学校が休みを認めてくれず、ロボットコンテストに出場できなかったメンバーもいました。学校外の学びにも生徒がどんどん参加することができるような環境が必要だと思います。

**秋田**　最先端の技術や知識と出合おうと思うと、学校の中の学びだけではどうしても限界がありますよね。立崎さんは、学校の外の世界からたくさんの刺激を受けたと思いますが、それによって、学校の学びに対する見方や考え方が深まったという経験もあるのではないですか。

**立崎**　ロボットの構造やプログラミングなどを考える中で、数学の授業で学んだことが生きた経験はたくさんあります。そうした経験をした瞬間は、目の前がぱっと明るくなったような気がしました。例えば、学校で習ったばか

撮影場所：立崎さんが所属する孫正義育英財団の専用交流施設「Infinity」。

# 好きなことに没頭する経験を通して、希望を持って未来を描ける力を！

ロボット製作をする中での発見やチームの仲間との活動、日々の雑感など、様々なテーマで書かれた立崎さんの日記に、担任の教師は真摯に向き合い、自身の人生経験を踏まえて言葉を返した。

りの三角関数をプログラムに組み込むことで、ロボットのアームを正確に動かすことができた時には、学校の授業に対する向き合い方が変化するほど感動し、その気持ちを日記を通して数学の先生に伝えたことを覚えています。

**秋田**　立崎さんのように、学校外の学びと教科の学びをつなげられた経験を先生に伝えてもらえると、先生も、教科に対する理解をさらに深めることができます。生徒が主体となって学びの意味を探究していることが実に素晴らしいと思いました。

## 学校の先生にしかできない大切なことがある

**立崎**　今、私が気になっているのは、先生方が仕事に追われていて、とても忙しくしていることです。それはすごくもったいないことだと思います。先生方には、一人ひとりの生徒に向き合って、それぞれの生徒に合ったサポートをすることに力を注いでほしいですし、そのためにも、ICTやAIなどを活用することで、授業の準備などがもっと楽になればいいのになと思っています。

**秋田**　高校生からも、「先生方がとても忙しく見える」とよく聞きます。先生は大変そうだと生徒が思っているこの状況は、放置してはいけない問題だと私も思います。好きなことに没頭する生徒に向き合い、自分の人生の経験も交えて、その生徒の素晴らしさを認めることは、生身の先生にしかできないことです。立崎さんとお話しして、これからの学校においても変わらない、とても大切なことを確認できたと思います。ありがとうございました。

対話 2

# 地域に飛び出し、時間割を超えた学びを深める学校に

学習院大学教授、
中央教育審議会委員
**秋田喜代美**

×

福島県立福島高校
3年生
**伊関佳純**（いせきかずみ）

校内の仲間、そして地域の人たちと協働して防災教育に取り組んできた伊関さん。防災という社会的テーマを探究する中で気づいた高校生の力や使命を踏まえて、これから創りたい社会と教育に望むことを、秋田先生と語り合った。

〈伊関さんのこれまでの歩みはP.7で紹介〉

## 地域の人たちと学んだ「幸せ」のあり方

**伊関**　私が創りたい社会は、地域住民の関係性が豊かな社会です。私は防災について探究する中で、住民同士の結びつきが強い地域ほど、災害時に円滑な対応ができることを学びました。また、高齢社会という観点でも、地域の人たちの見守りという「共助」があれば、各家庭の高齢者の介護を支援することにつながります。

**秋田**　伊関さんのお話を聞いて素晴らしいと思うのは、防災を、形骸化した避難訓練の見直しといった学校の問題にとどめず、地域と学校の普段のつながり、さらには学校が避難場所として多様な地域住民を迎え入れる時の高校生の存在意義など、広い視点で考えたことです。自分たち高校生は、地域の人たちをつなぐハブであると自覚して、防災を見つめ直したんですよね。

**伊関**　住民間の関係性が希薄な地域社会は、安全でも安心でもないと私は思います。また、すべての人が尊重されるような地域社会であることも大切です。コロナ禍においては、感染した人を排除するような事例もありましたが、そうしたことを繰り返してはいけないと思っています。

**秋田**　防災教育を通して社会的弱者と呼ばれるような人にも目が向いたことで、一人ひとりの幸せを実現するつながりのあり方を捉え直されたんですね。人が他者とのつながりや関係性に基づいて互いに幸福になっていくことに高校時代に気づいたことは、大きな価値があると思います。

## 高校生にできることはもっとたくさんある

**伊関**　私がこれからの学校に望むのは、もっと地域とのかかわりを深めてほしいということです。中学校、高校と進級するに連れて、地域と学校との距離は開いていったと私は感じました。しかし、私が仲間たちと福島高校で防災ワークショップを開催した時には、想定以上のたくさんの地域住民が参加してくれました。高校生が声を上げることを、地域の人たちは期待してくれているのだと思いましたし、高校生だからできることはたくさんあるはずだと考えるようになりました。

**秋田**　「高校生だからできることがある」という考えは、防災ワークショップなどを通じて学校から外の世界へ一歩踏み出し、高校生以外の人たちと触れ合ったからこその気づきですね。

**伊関**　学校では、「これからは地域との結びつきが大事」とよく言われます。しかし、高校生が地域との新たな結びつきをつくる実践の場は、高校にはほとんどありません。地域とのつながりなど、社会問題に関心を持つ高校生は少なくないのですから、実践に足を踏み出そうとする生徒がいたら、学校にはぜひ応援してほしいと思います。その点、最初に私たちの取り組みについて相談した時、「やってみよう」と前向きな言葉をかけてくれた先生にはとても感謝しています。「高校生だから難しいのではないか」という不安な気持ちを先生が取り除き、私たちの主体性を尊重しながら伴走してくださったことで、私たちは活動を広げていくことができました。

撮影場所：伊関さんが通う福島高校の教室。

# 人とのつながりの中で一人ひとりが幸せを実感できる社会を！

学校周辺の危険地域を洗い出したマップを地域住民と作成し、共有。さらに、オリジナルの防災ゲームを開発して地域住民とともに取り組むなど、伊関さんの活動は常に地域とともにあった。

## 一人ひとりの生徒を信頼し、学びを委ねる

**秋田**　これからの学校では、それぞれの生徒が関心を持ったテーマについて探究する時間がますます重要になります。だからこそ、あらかじめ時間割で決められた授業も大切ですが、時間割で決められていない学びや、学校外で多様な人々と創っていく学びも同じくらい大切なのだと思います。

**伊関**　秋田先生のお話を聞いて、自ら学ぶこと、探究することは、チャイムによって区切られるものではないと思いました。私が取り組んだ防災教育についての活動も、チャイムで区切ることはできない活動でした。時間割で決められていて、チャイムで区切られる学びももちろん大切ですが、チャイムで区切られない学びに取り組む高校生をもっと応援する社会になればいいなと思いますし、高校生の背中を押すことで、きっといろいろな活動が生まれてくるのではないでしょうか。

**秋田**　私は、学校の中で流れる時間を見直すことが、これからの教育を考える上では必要だと思っています。生徒によっては、授業に集中できる時間は50分よりも短いけれど、探究したいことについては時間を忘れるほど長く没頭できるかもしれない。一人ひとりの生徒を信頼し、学びを委ねることで、本人が納得いくまで学びを深めていけるような学校の時間のあり方を考えていきたいです。伊関さんのように、学校という場所や時間割を超えて深い学びにたどり着ける生徒が、1人でも多く生まれるような教育でありたいと思いました。ありがとうございました。

対話 3

# 互いの個性を尊重し、失敗してもやり直せる学校に

学習院大学教授、
中央教育審議会委員
**秋田喜代美**

×

内閣府認定特区高等学校
明蓬館（めいほうかん）高校 岐阜SNEC3年生
**清水陸志（りくし）**

起立性調節障害によって、中学校、高校で不登校を経験した清水さん。通信制という新たな学びの場を得て、自分の人生における「失敗」の意味について考えた経験を踏まえて、これから創りたい社会と教育に望むことを、秋田先生と語り合った。

〈清水さんのこれまでの歩みはP.7で紹介〉

## 学びの場は、1つだけではない

**清水**　私が創りたい社会は、失敗してもやり直せる社会です。私は、起立性調節障害が原因で全日制の高校を退学した時、自分は居場所を失ったと感じました。通信制の高校で再び学ぶことができるようになった私のように、「普通」からはみ出た人でもやり直せる社会を創っていきたいです。

**秋田**　ご自分の体験を基に、失敗してもやり直せる社会の必要性を語ってくれた清水さんに心から感謝します。近年、コロナ禍などを背景に、不登校の子どもの数が増えていますが、どの子どもたちも学びを諦めないで済む社会でありたいと私も思います。学びの場は、今通っている学校だけではないですからね。清水さんは今、どんな高校生活を送っているのですか。

**清水**　今は週4日登校しています。登校時間は体調を見ながら決めていますが、大学入試の準備もあるので、9時過ぎには学校に着くようにしています。学校に着いたら、先生方と相談しながら、その日の学習内容を決めます。学年の枠を超えて生徒同士で話し合いながら学ぶ時間もたくさんあります。

**秋田**　学校は、それぞれの生徒の状態を何よりも尊重し、生徒は、自分の将来を見通して自律的に学びを設計している点が素晴らしいですね。

**清水**　不登校になった時は本当につらかったのですが、今は不登校を経験してよかったと考えています。失敗をしたからこそ学べたことがあり、諦めない力が身についたと思います。

**秋田**　誰もが失敗や挫折をするものだというあたり前のことを踏まえた上で、社会や学校のあり方を私たちは考えなければいけないのだと、清水さんに教えていただいた気がします。

## 多様な見方や考え方を養える心理学を学ぶ時間の創設を

**清水**　ADHD（注意欠如・多動症）の有病率は報告によって差がありますが、学齢期の小児の3～7％程度と考えられているのに対して、起立性調節障害の罹患率は中学生で約10％と言われています。しかし、この病気について知らない人が多く、「怠けだ」といった不適切な言葉を投げかけられている現状があります。この病気に対する認知を広げたいです。

**秋田**　様々な障害や個性があることを理解し、生徒も教師も互いに支え合う学校が求められていると思います。先生方は多忙なため、様々な障害や個性について学び、理解するまでには時間がかかるのも事実ですから、外部の専門家などと連携して、困っている生徒を支援する仕組みづくりが必要です。

**清水**　様々な障害や個性があることを理解し合うためにも、義務教育や高校で心理学を学ぶ時間を設けてほしいです。私は病気をきっかけに心理学を学び始めましたが、そのおかげで、自分の不登校の背景には、何でも完璧を目指す思考の癖があることが分かりました。多様なものの見方や考え方を知り、自分自身を客観的に理解することは、他者理解にもつながります。すべての子どもにとって、心理学は生きていくために必要な学びだと思います。

**秋田**　自分を深く知り、人生をよりよ

撮影場所：清水さんが通う、明蓬館高校岐阜 SNEC の学習スペース。

## 失敗しても諦める必要はないし、失敗の中から学べる大切なこともある！

### 起立性調節障害についての清水さんの願い

この病気についてもっと知ってもらうことに加えて、

❶整体は、この病気の改善に効果的だと言われています。実際、私も整体によって症状が改善されて、随分助けられました。しかし現在、整体の施術代は保険適用外のため、費用の捻出は簡単ではありません。整体施術の保険適用を望みます。

❷起立性調節障害の子どもが通いやすい学校を創ってほしいと思います。柔軟な登校時間やオンラインを活用した授業出席が認められることと、整体を校内で受けられるなどの支えがあるとありがたいです。

いものにする学びは、高校の教科の中だけにあるわけではないということを示す好例ですね。心理学は、清水さんの今後の進路にも影響しそうですか。

**清水**　はい。既に心理学の民間資格を取得しましたが、高校卒業後は大学に進学し、もっと専門的に心理学を学びたいと考えています。

## 自分の興味を起点に教科の学びの意味を知る

**清水**　私は不登校になる前、塾にも通って5教科を真面目に勉強していましたが、その面白さが分かりませんでした。不登校がきっかけで心理学に出合えましたが、あのまま学んでいたら、学びの楽しさに気がつかなかったのではないかと思っています。

**秋田**　学びの意味を感じられるような深い経験が生まれる授業が、特に中学校や高校で求められていると思います。清水さんは、心理学に興味を持ち、探究したことがきっかけで、学ぶことの意味や楽しさに気づいたことはありませんか。

**清水**　あります！　ストレスについて探究している時、唾液アミラーゼの数値が変化することを知り、生物を学ぶ意義を感じました。また、心理学を通じて、答えが1つではない問いを立て、考えていく力を身につけることの大切さにも気づきました。

**秋田**　自分の興味を起点に探究する中で学びへの姿勢が変わり、視野も広がったことは、素晴らしいと思います。高校もそうした学びの場になっていくことが大切だと、改めて思いました。ありがとうございました。

# 一人ひとりのよさを認める学校が、誰もが幸福な社会を創る

学習院大学文学部教授、中央教育審議会委員
秋田喜代美

**あきた・きよみ**　学習院大学文学部教授。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。東京大学教育学部助手、立教大学文学部助教授、東京大学大学院教育学研究科教授を経て、現職。第12期中央教育審議会委員も務める。専門は教育心理学、授業研究。主著に、『学びの心理学』（左右社）、『学校教育と学習の心理学』（共著、岩波書店）、『新　保育の心もち』（ひかりのくに）などがある。

## 私たちが目指す社会とは

### 誰もが幸せな社会を創りたいと、皆が語った

中央教育審議会が取りまとめた「次期教育振興基本計画について（答申）」（以下、基本計画）では、これからの教育の総括的な基本方針として、「2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイング（＊）の向上」の2つのコンセプトを掲げています（P.15図1）。グローバル化や気候変動などの地球環境問題、少子化・人口減少、都市と地方の格差などの社会課題、そして国際情勢の不安定化の中で、この社会を持続的に発展させながら、一人ひとりの幸福を実現することが私たちには求められています。

今回対話した3人の皆さんは、持続可能で誰もが幸福に生きることができる社会を自分の手で創りたいと異口同音に語り、それぞれが主体的に活動していました。

立崎さんは、コロナ禍の中でフェイスシールドの製造という社会貢献活動に取り組み、高校卒業後は、海外大学進学に先立ちギャップイヤーを設けて企業で働く姿から、多様なキャリアパスがあることを私たちに示してくれました。

伊関さんは、学校と地域がつながり、多様な人が支え合いながら生きていくコミュニティーづくりに、防災というアプローチから挑戦しました。

そして、清水さんは、起立性調節障害によって高校を中退せざるを得なかった状況の中で、自分自身を見つめ直し、新たな目標を見つけた経験を基に、失敗や挫折があってもやり直すことができる社会、次の成長を期待し合える社会の大切さを語ってくれました。

### 3人の生き方から目指す社会の姿が見える

基本計画では、誰1人取り残さず、すべての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進を掲げています。

立崎さん、伊関さん、清水さんの3人は、それぞれの生き方を通じて、急激に変化し続ける社会においても一人ひとりがよりよく生きることができるということを、私たちに教えてくれました。そして、自らの生き方だけでなく、「これからの社会はこうなってほしい」、「今の社会にはこんな矛盾がある」、「こうすれば、みんながもっと幸せになれる」といった提言もしてくれました。

3人の皆さんとの対話を通して私は、若者たち、子どもたちが意見表明をできるよう、社会全体として彼らの声に耳を傾けることの大切さを感じましたし、その意味でも、教育が社会に対して果たす役割はますます大きくなっていると思いました。

＊ 身体的・精神的・社会的によい状態にあること。短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念。

図1 次期教育振興基本計画のポイント

**次期教育振興基本計画のコンセプト**

- 2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成
- 日本社会に根差したウェルビーイングの向上

**今後の教育政策に関する基本的な方針**

**グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成**
- 主体的に社会の形成に参画、持続的社会の発展に寄与
- 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善、大学教育の質保証 など

**誰1人取り残さず、すべての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進**
- 子どもが抱える困難が多様化・複雑化する中で、個別最適・協働的学びの一体的充実やインクルーシブ教育システムの推進による多様な教育ニーズへの対応 など

**地域や家庭でともに学び支え合う社会の実現に向けた教育の推進**
- コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進、家庭教育支援の充実による学校・家庭・地域の連携強化 など

**人生100年時代に複線化する生涯にわたって学び続ける学習者**

**教育デジタルトランスフォーメーション（DX）の推進**
- GIGAスクール構想、情報活用能力の育成
- 基盤的ツールの開発・活用、教育データの分析・利活用の推進 など

**計画の実効性確保のための基盤整備・対話**
- 学校における働き方改革のさらなる推進
- NPO・企業等多様な担い手との連携・協働 など

＊中央教育審議会「次期教育振興基本計画について（答申）【概要】」を基に、編集部が抜粋して作成。

# これからの高校の役割とは

## 一人ひとりの生徒のよさを認める学校に

これからの高校教育には、社会を生き抜くために必要な最低限の資質・能力を育みながら、生徒の多様性を尊重し、一人ひとりのよさを伸ばしていくことが求められます。そのためには、興味・関心を軸にした深い学びが求められます。高校では、文理に分かれて学ぶことも多いですが、幅広い教養を学べることが高校のよさでもあり、学びを深めることにもつながります。大学入試がそうした学びの延長に位置づけられていくことも必要でしょう。

授業の形態、教える内容、教材や教具は時代とともに変化します。しかし、生徒が教師に支えられ、教師との信頼関係を土台に学び続けるという点は、日本の教育の不易であり、日本社会に根差したウェルビーイングにもつながっていく価値だと思います。

つながりという点では、学びと社会とのつながりに気づく機会も重要です。教師や生徒が、地域住民とともに社会の課題について考えたり、具体的な問題を解決したりする探究の面白さを味わうことで、生徒は自身が社会の創り手であると自覚するからです。

## 社会の創り手を育て、未来を創る教師という仕事

ただ、立崎さんも指摘していましたが、先生方が忙し過ぎる現状は改善しなければなりません。残業時間等の勤務実態調査を進めながら、学級定数などについて議論していくことが必要ですが、それと同時に学校という場に、教育や福祉、医療、さらには組織づくりや働き方に詳しい多様な専門家、サポーターが参画し、先生方とチームを組むことで、先生方がご自分の仕事に専念できるような学校を創ることが求められていると思います。

生徒のウェルビーイングの実現と先生方のウェルビーイングの実現は、一体化して取り組むべきものであるという前提で、これからの教育のあり方を考えることが重要です。

私は3人の皆さんと対話をして、改めて高校生は、社会を変える大きな力を持っていると思いました。先生方も日々生徒と接する中で、私と同じことを感じられているのではないでしょうか。まさに現場の先生方が、次の社会の創り手を育てているのです。どうか教師という仕事に、これまで以上に誇りを持ち、これからも生徒を支え続けていってください。

# 多様な生き方を尊重し合える社会の実現に向けて教師がすべきこと

静岡県立小山高校 美那川雄一 × 静岡県立静岡東高校 神谷隼基

かつて先輩・後輩として同じ学校に勤務したこともある２人の教師が、
３人の若者の言葉を受け止め、これからの学校、そして教師のあり方について語り合った。

## ３人の若者の言葉を受け止め、考えたこと

### 一人ひとりの生徒が描いた生き方を、尊重し合える社会を創りたい

#### 自分が望む社会と生き方を明確に語らせたい

**神谷**　美那川先生と私は、前任校で先輩と後輩の間柄でした。今日は、先輩である美那川先生が、３人の若者の言葉をどう受け止めたのか、そして先生が今どんなことを考えているのか、お話を聞くのを楽しみにしてきました。

**美那川**　３人の若者が創りたい社会を明確に語っていることに感動しました。理想の社会を掲げ、その実現に自分も寄与しようと思うから、３人は高校時代に主体的に学び、そしてこれからも学び続けるのだと思います。

**神谷**　生徒が夢を語り、創りたい社会を描けるようにすること、そして、その実現のために必要な力を身につけさせることが、高校教育の大切な役割なのだと改めて実感しました。ただ現実には、大学入試が近づくと、「この夢をかなえることは自分には無理なんじゃないか」、「夢の実現よりも、まずは大学合格を目指そう」と、創りたい社会を描く手が止まってしまう生徒もまだまだ少なくありません。

**美那川**　自分の生き方を自由に描くことは簡単なことではありません。実際、これまでの社会では、18歳で高校を卒業したら、難関大学に進学し、大企業に入ることなどが、人生における成功とされていました。しかし今は、私の教え子にも、海外に学びの場を求めたり、自らベンチャー企業を立ち上げたりする者がいます。海外大学への進学を前にギャップイヤーを経験している立崎さんのような生き方を、「その生き方もいいね」と尊重し合える社会になれば、自分の夢の実現に向けて歩き続ける生徒が増えると思うのです。私が創りたい社会は、そんな、自由で寛容な社会です。もちろん、そうした社会は、清水さんが創りたい「失敗を許せる社会」でもあります。

**神谷**　どんな社会を創りたいかと問われたら、多様な価値観を認め合える社会だと、私も答えます。日頃から生徒に、「大学に進学しさえすれば、人生の価値が高まるというわけではない」、「自分のやりたいことを見つけ、自信を持ってそのことに挑戦することに価値がある」などと話していますので、３人の若者の生き方に、私は心から共感します。すべての生徒が自分のやりたいことを見つけられるよう、高校生活の中に様々な出会いや経験の場をつくり、そして、自分の興味・関心や強み、幸せを感じる瞬間などを発見できるよう、声をかけ、気づきを促していきたいと、改めて思いました。

## 学校概要

### 静岡県立小山高校

**設立**　1985（昭和60）年
**形態**　全日制／普通科／共学
**生徒数**　1学年約120人
**2022年度卒業生進路実績**　国公立大は、北見工業大、岩手大、山梨大、静岡大、釧路公立大、都留文科大、静岡県立大、静岡文化芸術大、北九州市立大などに13人が合格。私立大は、成蹊大、専修大、東洋大、日本大などに延べ108人が合格。短大・専門学校進学53人。就職9人。

### 静岡県立静岡東高校

**設立**　1963（昭和38）年
**形態**　全日制／普通科／共学
**生徒数**　1学年約280人
**2022年度卒業生進路実績**　国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、千葉大、一橋大、横浜国立大、静岡大、名古屋大、大阪大などに139人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大、明治大、早稲田大、同志社大などに延べ96人が合格。海外大学進学1人。

高校生に必要な教師の支援とは何か

# 生徒が描く人生の中で、その「失敗」はどんな意味を持っているのかをともに考える

## 失敗を避けさせている教師としての自分がいる

**神谷**　生徒が、自分の人生を描き、歩んでいくためには、「失敗」との向き合い方を学ぶことが重要になると思います。「失敗」と思った出来事も、本人の向き合い方次第で、その意味が変わってくるからです。「あなたが目指す生き方においては、今回の経験は失敗ではなく、財産なのではないか」などと、教師が出来事の解釈を支援することで、生徒はその後の挑戦を恐れなくなるのではないかと思います。ただ、これまでの私は、生徒が失敗する前に手を差し伸べていました。教科学習でも探究学習でも、よい成績が取れたり、発表までたどり着けたりすることを優先し、十分に試行錯誤する機会を生徒に与えてこなかったように思います。

**美那川**　生徒本人が「失敗してしまった」と思った時こそが、教師の出番なのかもしれません。

以前勤務した学校では、卒業を待たずに途中で転学・退学する生徒が例年複数いました。彼らは18歳で高校を卒業するという生き方が成立しなくなったわけですが、私はとことん、そうした生徒と対話をして、転学・退学する理由を明確にするようにしました。実際には、本人にも本当の理由は分からないことが多いのですが、「これが原因だ」といったものを仮でもよいので言葉にすることで、「次はそれを乗り越えていこう」と新しい人生を歩み始めることができるからです。生徒が、「確かにそれが退学する原因かもしれない。それを踏まえて新しい進路を選びます」と語ることができれば、転学・退学という選択に意味が見いだされ、単なる失敗ではなくなるのだと考えています。

生徒が自分の決断に納得し、その後の人生を描いていくことが何より大切だと思います。ですから、私たち教師には、その助言が正しいかどうかよりも、生徒が前に進んでいけるかどうかが重要な時があるのです。

## 大切なのは、生徒が歩み続けること

**神谷**　実は私は、大学院で学んでいる時に、心と体のバランスを崩してしまい、研究を続けないといけないと分かっているのに、キャンパスに向けて足が動かなくなった時期がありました。そこで、心療内科でカウンセリングを受け、なぜ、そういう状態になってしまったのか、専門家と一緒に丁寧に自分を見つめ、自分はどんな自分でありたいのか、どんな人生を歩きたいのかを考えました。今回清水さんが、「不登校になったから自己理解が深まった」と話していましたが、私も自分の考え方の癖について、他者の助けを借りて自覚し、霧が晴れたような感覚を味わったことがあります。つまずいたからこそ得られるものが確実にあることを伝えることで、思い悩む生徒を支えていきたいです。

左）静岡県立小山高校　美那川雄一　みながわ・ゆういち　同校に赴任して３年目。地理歴史・公民科。

右）静岡県立静岡東高校　神谷隼基　かみや・としき　同校に赴任して４年目。数学科。

これからの高校教育の役割

# 生徒にとって、より雑多な学びの空間をつくり、対話の中で「大切なこと」への気づきを促す

## 多様性と良質な課題から学びを得る学校に

**神谷**　生徒が描く生き方を彩り豊かにするためには、様々な大人との出会いが必要です。対話する相手が自校の生徒や教師だけではなく、多様な年齢、職業の人であるほど、それぞれの生徒が描く生き方を受け止めることができる、寛容度の高い学校になれると思います。そうした学校の実現のためにも、高校は、もっと地域とのつながりを強めていくべきでしょう。そして伊関さんが語った通り、学校が地域のハブになることを、地域の人たちも期待していますから、例えば、地域の人たちが講師になって、自分が得意なことなどを題材にした学びの場を高校に開き、興味を持った生徒がふらりと参加できるようにすることで、学校はよい意味で雑多な学びの場になれるはずです。

**美那川**　地域の人を学校に迎え入れればそれで十分だ、というわけではありません。地域には、「開発か、自然保護か」といった、答えがすぐには出せない課題がたくさんあります。そうした、生徒が葛藤するような良質な地域の課題を授業に持ち込めるかどうかが、私たち教師の腕の見せどころです。生徒が頭を悩ませ、他者と話し合わずにはいられないような題材を、探究学習にも教科学習にも取り入れて、教科横断的な学びを展開しながら、生徒に資質・能力を育んでいきたいですね。

## 一番大切なことは教えずに気づかせる

**美那川**　これからの社会を創る生徒を育てるために、私たち教師の教育観の転換も求められています。かつての学校では、生徒にたくさんの知識を与えることで、社会で活躍できる人材を育ててきました。しかし、これからの学校では、学んだことのすべてがこの先も正しいとは限らないこと、そして知識は学んだ時のそのままの形で使えるとは限らず、状況に応じて組み替えて活用すべきことを生徒に伝えることが求められていると思います。そして実際に、授業の中で、自分が持っているものの見方・考え方を疑ってみたり、知識を再構成したりする体験をさせることが、今後ますます重要になってくると思います。そうすることで生徒は、学び続けることの意味と大切さを実感するのではないでしょうか。

**神谷**　数学の教師として自戒しているのは、自分が上手に解法を教えさえすれば生徒の学力は向上すると思い込んだり、自分が教えたから生徒が伸びたのだと喜んだりしないことです。それは、生徒ではなく教師が中心にいる状態ですし、自分が生徒だった時に、そういう先生の指導についていけなかった経験があるからです。

**美那川**　教師が一方的に教えた知識は、生徒の長い人生の中で考えれば、それほど重要なものにはならないかもしれません。これからの教師にとってより重要なのは、授業で一番大切なことは教師が説明せずに、生徒自身につかませることです。そのためには、すべてを分かりやすく教えることよりも、生徒がよりよく学ぶためには「何を教えないか」までをも見極めて、授業をデザインする力が教師に求められます。生徒同士、あるいは学校外の人たちと対話する中で一番大切なことに気づく経験が、学び続ける力を生徒に育んでいくはずです。

これからの学校を創る教師として

# 生徒、そして同僚と対話しながら、それぞれの人生の創造を支えていきたい

## 技術の進化など、社会の変化をキャッチする

**神谷**　これからの社会の創り手である生徒を支援していくために、私はもっと社会の変化に敏感でありたいと思っています。例えば最近は、ＣｈａｔＧＰＴなどの生成ＡＩを活用し、アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた教材の作成に挑戦しています。ＡＩへの指示内容を改善していくことで、かなりよい教材が作成できるようになりましたが、最大の収穫は、ＡＩを活用するためには、ＡＩに対して適切な課題を設定したり、ＡＩの回答を現実の状況に合わせて精査したりする必要があることなど、人間に求められる力や人間にしかできないことが確認できたことです。今後、ＡＩへの指示内容を練り上げ、校内で共有すれば、教材作成の省力化につながるかもしれません。

**美那川**　特に若い先生方が業務に追われていて、これまでの仕事で自分が何を得てきたのか、これからどうありたいのか、未来を描きにくくなっているように感じます。だから私は、若い先生方の話の聞き手になり、未来を描く手伝いをしたいと思っています。ただ、先輩教師から「困り事はない？」と聞かれても、率直に打ち明けることは難しいものです。そのため私は、現場の声を基に作られている『ＶＩＥＷ ｎｅｘｔ』を若手教師の前に広げて、「こんな学校があるけれど、どう思う？」、「本校はどうだろう」などと対話し、若手教師と一緒に新しい学校を創っていくようにしています。

**神谷**　美那川先生と同じ学校に勤務していた時、私は先生がいる社会科準備室を訪ねて、お茶を飲みながらいろいろな話をさせてもらいました。私たちは、社会科準備室のことを「カフェ」と呼んでいましたね。カフェのようなリラックスした雰囲気の中で、生徒も教師も互いの人生を多様な視点で認め合い、支え合う学校にしたい。心からそう思いました。

次ページから

## 対話から見えてきた、これからの学校教育の課題を深めます

学習院大学教授で、中央教育審議会委員も務める秋田喜代美先生も言及されていた「次期教育振興基本計画（P.15）」や、ここまでの若者３人と秋田先生との対話、そして美那川先生と神谷先生の対談を踏まえて、VIEW next 編集部は、これからの学校教育の課題を、次の３つに焦点化しました。

### これからの学校教育の実現に向けた課題


課題１　学び続ける人材の育成　▶ P.20～

課題２　地域・家庭とともに生徒を育てる　▶ P.24～

課題３　教師が生き生きと働き続けられる環境づくり　▶ P.28～


課題１のキーワード「学び続ける」は、「次期教育振興基本計画について（答申）【概要】」においても、「人生 100 年時代に複線化する生涯にわたって学び続ける学習者」という言葉で、「今後の教育政策に関する基本的な方針」の中心に位置づけられています。これからの社会を生きていく上で必要な様々な資質・能力を身につけていくための土台として求められるのが、「学び続ける」という姿勢です。

そうした「学び続ける人材」を育成していくためには、課題２のキーワードである「地域・家庭」との連携が重要になります。地域・家庭と学校が、ともに学び、支え合うことで、社会に開かれた教育課程が実現していくと考えます。

そして、課題１や課題２への取り組みの中心を担うのが教師であり、「教師が生き生きと働き続けられる環境づくり」が、これからの学校教育において最も大切なことの１つであると、私たちは考えました。

次ページからは、この３つの課題について深めていくとともに、８月号から、これらの課題に関する連載をスタートいたします。

# 自由に学び、没頭する中で、「探究し続ける人」が育つ

変化の激しい社会においては、「学び続ける」ことが求められる。
では、「学び続ける」とは、具体的にはどのような営みであり、「学び続ける人材」は
どのような教育によって育成することができるのだろうか。高校時代の探究活動で経験した「最高の失敗」を、
東京大学の学校推薦型選抜合格や大学での学びにつなげた大学1年生の歩みをひも解きながら、
その恩師の1人である高校教師と有識者とともに、考えていく。

東京大学文科三類1年生
（長崎県立諫早（いさはや）高校卒業）
**岸 ふみ**

長崎県立諫早（いさはや）高校
**後田康蔵（うしろだこうぞう）**

國學院大學
人間開発学部初等教育学科 教授
**田村 学**
専門は教科教育学、教育方法学、カリキュラム論。文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官などを経て、現職。

**長崎県立諫早高校**
設立 1911（明治44）年　形態 全日制・定時制／普通科／共学　生徒数 1学年約280人　2022年度卒業生進路実績 国公立大は、東北大、東京大、京都大、大阪大、神戸大、九州大、長崎県立大などに203人が合格。私立大は、中央大、東京理科大、早稲田大、立命館大、福岡大、長崎国際大、長崎純心大などに延べ140人が合格。

## 岸さんの探究活動 そのプロセスと内面に生じた変化

### グリーンウォッシュの原因が自分の中にあることに気づく

探究学習では、規格外として廃棄されるみかんのアップサイクル（創造的再利用）に取り組みました。地元・長崎の特産品で、私も大好きなみかんが、日本で最も多く廃棄される果物と知り、その問題を解決したいと考えたのです。

私は、廃棄みかんの皮から抽出した精油で香りづけしたキャンドルの製造に着手しました。当初は、自分の興味を追究して社会貢献できることに夢中になりました。ところが、農家の方にみかんの買い取り金額が低いことを謝った際、「どうせ『ゴミ』だからね」と言われて、小さな違和感を覚えました。今の活動では、「規格外品はゴミ」という価値観に変化を起こせていない、創造性を認めてもらえていないと感じたのです。完成した商品は完売し、活動は国内外の大会で複数の賞を受賞しましたが、違和感は残り続けました。

その時のモヤモヤした気持ちに向き合うきっかけとなったのは、大学生の先輩から投げかけられた、「本当に環境への配慮になっている活動なの？」という問いでした。改めて調べてみると、農作物を畑に廃棄することに環境負荷

# なぜ、「失敗」は豊かな学びへとつながったのか

## 2回目の探究サイクルだから見えてくるものがある

**田村**　自らに問い続けて、探究が深まっていく岸さんの学びに感動しました。地域の方と語り合うなど、体験を通じた本質的な学びを重ねたからこそ、自分の活動の意味を問い直し、課題を更新することができたのでしょう。農家の方とのやり取りや先輩の言葉など、様々な体験が本当に豊かな学びにつながっていることが見て取れます。

**後田**　岸さんの活動では、農家の方の何気ない言葉が最高の一次情報となり、それがきっかけとなって気づきをもたらしました。私たち教師は言葉を厳選して授業を進めていますが、活動を通した岸さんの成長を目のあたりにして、教師の言葉は生徒にどこまで届いているのだろうかと、自省しました。

**田村**　岸さんの活動を尊重し、さらにそこから自身が学ぼうとされる後田先生の謙虚な姿勢が、岸さんの学びを生み出す背景にあるのだと思いました。

**岸**　後田先生の言葉で心に残っているのは、「PDCAサイクルを1周回して、次のサイクルを回そうとしているんだね」というひと言です。1周目のサイクルでは、モヤモヤした気持ちを抱きながら活動をしていましたが、その経験があったからこそ、2周目のサイクルにおいて、活動のどこに問題があるのかを分析して、より深い探究につなげられたのだと、自分の現状を整理することができました。

## 夢中で楽しんだ探究が、教科学習に結びついていった

**田村**　一定の時間とともに、自分で選択して行動できる自由度が確保されていると、興味・関心がより高まって新たな問いが生まれたり、他者に話を聞いたりしたくなるものです。そうした環境が整っていたからこそ、岸さんは2周目の探究のサイクルに入れたのでしょう。活動と授業の両立でとても忙しかったはずですが、これほど頑張れた理由は何だったのでしょうか。

**岸**　純粋に活動が楽しかったからだと思います。忙しかったのは事実ですが、やりたいという気持ちが強くて、「馬鹿力」を発揮できました。

**田村**　時間に余裕があれば必ずしも理解や定着が進むとは限らず、短時間でも全力で集中することが、本人の能力の開発には重要だと思います。岸さんの活動は、日常生活を豊かにするだけではなく、教科学習にも好ましい影響があったのだろうと推測します。

**岸**　この先、大学などで学び続けるためには、基礎学力が不可欠であるという思いがあり、授業よりも活動の方が大事だとは考えていませんでした。活動を進めるに連れて、活動が教科学習と結びつく感覚もありました。例えば、みかんの皮の蒸留に関する論文で化学の賞を受賞しましたが、当初は自分の探究が化学の領域のものという認識はありませんでした。活動を機に、あまり得意ではなかった化学の勉強を頑張りたいという気持ちになりました。はほとんどなく、一方、廃棄みかんの運搬で排出される$CO_2$や、製造に用いる電力や水を考慮すると、アップサイクルをする方が環境負荷が大きいことが分かりました。つまり私の活動は、環境に配慮した取り組みのように見えて実態が伴っていない、「グリーンウォッシュ」だったのです。

私は、この失敗の原因を、「規格外品の廃棄は悪」、「農家は困っているはず」といったバイアスによるものだと考えました。そして、「環境意識の高い中高生が善意を持ってグリーンウォッシュに陥る原因に関する質的研究」という論文を作成し、東京大学の学校推薦型選抜に出願して合格しました。

大学では、集団内の規範やそこから生じるバイアスと自分との間の境界線を保ちながら、他者や物事を正しく理解する力である「自他分離的な共感性」について研究したいと考えています。

規格外のみかんの皮むきイベントには21人の高校生、大学生が参加。自分の手で触って、食べて、考えた。

「ROKU」というブランドを立ち上げ、キャンドルを販売。すべて天然由来の素材を使用して製造した。

# 「学び続けること」は「考え続け、探究し続けること」

## 生涯学習社会から、生涯「探究」社会へ

**田村**　岸さんのお話から、これからも学び続けるという強い意志が伝わってきます。社会が成熟して、少子高齢化や地域活性化といった、多様で複雑な問題に直面する中で、生涯学習社会から生涯探究社会へと変化していく必要があると考えます。一人ひとりが生涯にわたって自分のできる範囲で探究し続けることで、そうした問題が解決に向かう可能性があるからです。その意味では、「学び続ける」とは「考え続ける」、「探究し続ける」、あるいは「問い続ける」と言い直した方がよりしっくりくるかもしれません。当然、学校でもそうした学びが今後一層求められますし、習得や活用から、いかに探究へとつなげるかを考える必要があります。

**岸**　私が考える「学び続ける人」とは、「何が問題か」、「この現象が起きる原因は何か」などと、自分の頭で思考し続けられる人です。活動を始めた当初の私は、そうではありませんでした。規格外のみかんを廃棄せざるを得ない理由は調べましたが、そもそも「廃棄することは問題か」という思考は全くなかったのです。そんな私に「学び続ける力」が身についたとしたら、その転機は、自分の活動がグリーンウォッシュだと気づいて気落ちしたことでした。1年半にわたって全力で取り組んだ活動を自分で否定するのはとても苦しいことでしたが、その経験があったからこそ、クリティカルに考える力が育ったのだと思います。失敗することの意味・価値を身をもって学びました。

## 自らに問いを向ける中で、自己を真に信頼していく

**後田**　活動中の岸さんは、決して自信満々には見えませんでした。恐らく、常に自分に何かを問いかけたり、他者の批判を受け入れたりする姿勢があり、よい意味での「不安定さ」があったのだと思います。自転車は不安定だからこそペダルをこぎ続けないと前に進めないように、自分が不安定であると認められる人が、学び続け、探究し続けられるのだろうと、岸さんの姿から学びました。

私は生徒に対して、探究学習が行き着く理想の形は、思い込みや社会の深い矛盾に気づくことだと伝えています。岸さんは問い続け、考え続けたことで、「最高の失敗」を経験し、そうした気づきを得たのだと思います。

**田村**　岸さんは活動に真剣に取り組んでいたが故に、先輩の言葉が大きなインパクトを持ち、本質を突き詰めようという思いに突き動かされたように見えます。そうした自分の内面に起こるギャップや違和感は、問い続けるための重要なエネルギーになります。

他者からよい評価をされることなども、もちろん後押しにはなりますが、本当の自信は、自己承認や自己信頼によって醸成されると考えます。「本当に意味のある活動なのか」、「私のやりたいことは何なのか」などと考え続ける中で、次第に確固たる自信が芽生えます。教師にできる支援という観点からは、パフォーマンス評価なども活用しながら、生徒が変容するプロセスを見取っていくことが、これからは一層大切になります。プロセスを見取り、生徒自身の自己評価を教師が理解するという意味でも、後田先生を始めとする諫早高校の先生方がそうしたリフレクションを支え続けたことは、岸さんが探究を深める上で大きな支援になったと思います。

探究学習で
「最高の失敗」を経験した時、
生徒は思い込みや
社会の矛盾に気づく

# 探究し続ける人を育てる学校とは

## 情報があふれる社会で学校は学びの管制塔となる

**後田**　実は探究が意味することが自分の中では曖昧でしたが、今回の対話を通じて、「主体は自分だという自覚を持って取り組むのが探究である」と、明確になったように思います。そうした、探究し続ける人材を育てる学校とは、授業以外の時間は生徒の自由を最大限に尊重する学校だと思います。自由を尊重することで生徒の個性が具現化され、集団の中に多様性がつくり出されます。そうした場をつくるためには、教師は学びの主体は生徒にあると考え、例えば面談の場では、教師がインタビューするような姿勢で謙虚に生徒に向き合い、生徒の考えを引き出すことが求められます。

**岸**　様々な学問に詳しい先生がもっといるとよいと思います。というのは、複雑な課題意識がどの学問につながるのかを、生徒だけで解明するのは難しいからです。私が関心を抱いた「共感性」が、仏教など、様々な分野に関連していると気づいたのも、後田先生から薦められた書籍がきっかけでした。

**後田**　1つの課題でも、様々な学問が複雑に絡んでいますからね。文理選択などを始めとして、従来の進路指導は、課題を単純化し過ぎていたのかもしれません。

**田村**　学びは豊かで多様なものだからこそ、私は、バランスがキーワードになると考えます。まず、習得と探究のバランスです。教科の専門家である教師が効果的な教科学習を展開することで、探究との相乗効果が生まれるでしょう。加えて、言葉と体験のバランスも重要です。これまでの学校は、言葉や記号を学ぶことを重視する傾向が強かったですが、地域の住民などに話を聞くといった体験も重要な学びの要素です。体験を言語化することで学びは深まりますから、言葉と体験が調和した学びが大切だと考えます。

**後田**　「巨人の肩の上に立つ」という言葉があるように、先人の知恵は探究学習においても必要です。ただし、単に知識を与えるのではなく、先人が何を疑問に感じ、どのようにして知恵を生み出したのかを追体験できる授業をして、生徒がそうした授業の中でどのように変化したのかを見取っていきたいと思っています。そのためには、教師自身も探究し続ける必要がありますし、そうした自分の姿を、学び続けるロールモデルとして生徒に示していきたいです。

習得と探究、
そして言葉と体験。
学校や教師が
多彩な学びの管制塔に

**田村**　ICTの普及などを受けて、学校の存在価値を問う声もありますが、生徒が活用できる知識や情報が爆発的に増えるからこそ、生徒の学びの自律を支援する管制塔のような存在がますます重要になるでしょう。そうした存在であるのが学校であり、カリキュラムや学習内容などの教育の専門性を持つ教師が、生徒一人ひとりの学びに寄り添うことで、学び続ける生徒が育つのだと思います。学校は、多様な他者が存在するからこそ、豊かで協働的な学びが生まれる場でもあります。現場の先生方が築いてきた豊かな学校文化の価値は、より一層高まっていくと考えます。

**「学び続ける人材の育成」のために、学校はどのような実践をしていけばよいのか――。**

「学び続ける人材の育成」のためには、教師が生徒の変容を見取ることが大切です。8月号以降では、本コーナーに登場いただいた田村教授の解説による学習評価をテーマとした新連載を予定しています。ご期待ください！

# 組織的な地域連携の中で生徒を育み、よりよい学校を創る

## ――静岡県・富士市立高校の実践から考える――

学習指導要領の前文にもある通り、生徒の資質・能力の育成は、生徒や学校にかかわるすべての大人に期待される役割となっている。地域全体で生徒を育てる学校づくりを推進するためには、学校・地域・家庭の連携が欠かせないが、学校と地域・家庭は、互いにどうかかわり合うとよいのだろうか。また、どのようなことが課題になるのだろうか。教育理念の1つに「コミュニティ・ハイスクール」を掲げる、静岡県・富士市立高校の実践を通じて考える。

地域に開かれた「コミュニティ・ハイスクール」として、様々な地域交流事業を数多く行う富士市立高校。地域住民等が学校運営に参画する学校運営協議会も、継続的に活動している。

地域連携の
**概要**

### 市の将来を担う人材の育成を求める地域の声に応える

静岡県・富士市立高校は、2011年の開校以来、地域の人々と協働して学校づくりを行うコミュニティ・ハイスクールを教育理念の1つとして掲げ、地域連携に取り組んでいる。

地域の未就園児との交流事業や地域のスポーツクラブと協働で行うサッカー教室、そして市役所との連携による英会話教室など、行政やNPOの協力の下、地域との交流を学校として主体的に深めてきた。近年は同校の取り組みが地域に認知され、市役所や企業の事業に高校生を参加させてほしいといった学校への依頼が増加し、積極的に生徒を地域へと送り出している。

富士市教育委員会指導主事で、富士市立高校の教育推進と広報活動を担当する滝陽介先生は、「将来の富士市を担う人材を育成したいという行政と、

将来の夢や探究心を育みたいという本校の方針が合致し、よい関係が築けている」と語る。

同校の地域連携が成功している要因は、校内の組織的な取り組みにある。

「地域連携というと、校内の教師全員の理解が得られにくく、探究学習や就職指導の担当といった一部の教師が担う単発の取り組みに終わることも多いと聞きます。本校は、地域に貢献する人材の育成を学校のミッションとして位置づけており、地域連携は、教科や分掌にかかわらず、すべての教師がかかわるものという共通認識を図ることができています」（滝先生）

富士市教育委員会 指導主事
**滝 陽介**
たき・ようすけ
県立高校教諭、富士市立高校教諭を経て、現職。

**学校概要**

**静岡県・富士市立高校**

**開校** 2011（平成23）年
**形態** 全日制／総合探究科・ビジネス探究科・スポーツ探究科／共学
**生徒数** 1学年約215人
**2022年度卒業生進路実績** 国公立大は、茨城大、静岡大、佐賀大、都留文科大、静岡県立大、静岡文化芸術大などに11人が合格。私立大は、駒澤大、専修大、東京農業大、日本大、立教大、立命館大、関西大などに延べ155人が合格。

同校では、全学科の2年生が、富士市の課題や理想とする富士市を挙げ、その課題に対する方策や理想の実現方法を高校生が考えて企画・提案する探究学習「市役所プラン」に取り組む。

「『市役所プラン』に取り組む期間は、2年生全員が、富士市市民部まちづくり課高校生職員に任命されます。地域の人と話し合いながら活動を進める中で、地域住民の1人として、地域課題を自分事として受け止め、地域のために行動する力を育みます。そのように、地域連携は、本校の生徒、教師にとってごく身近なものなのです」（滝先生）

## リアルな生徒の姿を見せて、学校改革を後押ししてもらう

すべての教師がかかわる同校の地域連携だが、地域との恒常的な連携を牽引する役割を担い、地域連携の窓口である地域交流課という分掌が同校には設置されている。多くの学校では、地域連携を専門とする分掌はなく、主担当の分掌の仕事と地域連携を兼務することになる。そのようなことで教師が負担感を覚えることがないよう、同校は担当する分掌を置いたのだ。

「外部からの連携の依頼に対応するだけでなく、連携の内容と各教師の専門性をマッチングさせて担当教師を決めることもしています。スポーツやビジネスなどの専門知識を生かして地域とつながる教師が多いことも、本校の強みです」（滝先生）

学校づくりに地域の声を積極的に取り入れているのも同校の特徴だ。中学校長やPTA代表、地域人材などからなる学校運営協議会を年3回開催し、授業見学や生徒アンケートなどを基に、学校運営への意見や感想を述べ合ったり、改善点などを提案したりしている。委員の意見がきっかけとなり、生徒の満足度が低かった土曜講座の内容を改善した例もある。

「教師も課題に感じながらも、これまで改善してこられなかったことについて、委員のひと言が背中を押してくれたことがありました。あえて平日の昼間に協議会を行うことで、授業を見てもらえるようにし、学校の真の姿を知ってもらっています」（滝先生）

**図1 富士市立高校の多彩な地域連携の取り組み**

| | |
|---|---|
| 多世代交流サッカー | NPO法人と連携し、同校の人工芝グラウンドを使って、地域の人々と隔週でフットサルのミニゲームを楽しむ。 |
| ALTと楽しく話そう英会話 | 地域の生涯学習を推進するために、同校の生徒が市役所やまちづくりセンターと協働して行う英会話教室。 |
| 出張販売 | 富士市内にある児童クラブや高齢者社会福祉施設、地域の祭りなどに出張して駄菓子などを販売する。 |
| ナイトウォーク | 市役所と連携して、地元小学生を対象に、夏休みの1日、体験入学のイベントとして、夜間の学校探検を行う。 |
| 市役所プラン | 同校の3年間を通じた探究学習「究タイム」の1つで、市役所が提示した課題に対する方策を考える、3科共通の2年次の必修授業。優秀班は、市役所や地域の防災イベントなどで発表を行う。 |
| 大学野球オータムフレッシュリーグの運営 | ビジネス探究科の3年生が、課題研究の授業で、地域の大学野球の交流試合の企画・運営に取り組む。 |

※学校資料を基に編集部で作成。

## 地域連携の成果と展望

### 生徒の志望・適性と地域のニーズのマッチングを意識

地域連携が進む中、教師の意識にも変化が表れている。滝先生は、「地域から参加要請があったイベントを生徒に紹介する際、生徒の希望進路を踏まえてふさわしい生徒を各学年団に選抜してもらっています。地域の期待に応えるとともに、生徒と活動のマッチングを意識することで、生徒の進路意識の向上も図っています」と語る。

同校では、学年団が中心となって、生徒一人ひとりの志望を把握するのはもちろん、探究学習に取り組ませる中で、プレゼンテーション力やコミュニケーション力など、生徒が外部の活動に参加する際に求められる力を身につけているかどうかも見ているという。

今後は、地域の依頼に応じて生徒を参加させるだけではなく、生徒が自ら「地域のこの問題を解決したい」と声を上げ、地域に提案し、主体的に地域の問題解決に取り組む意欲や姿勢を育んでいくことが目標だ。『市役所プラン』などの探究学習を通して課題意識を高めた生徒が、主体的に地域に足を運び、探究学習に取り組む仕組みをつくりたい」と、滝先生は語る。

これから地域連携の取り組みを充実させたいと考えている学校は、地域連携の意義を学校全体で共有することが大切だと、滝先生は強調する。

「本校が組織的に地域連携に取り組めているのは、教師全員が教育理念を共有することができているからにほかなりません。どんな生徒を育てるのか、なぜ、地域連携が必要なのかを校内で議論し、共通認識を図ることが大切だと思います」

**学校と地域・家庭がともに生徒を育てていくためには、学校と地域・家庭の双方にどのようなことが必要とされるのか――。**

本記事で取り上げた静岡県・富士市立高校の実践を踏まえ、8月号からは、地域や家庭から見た学校の学び・生徒の姿をテーマとした連載をスタートします。ご期待ください！

### 地域の声　地域の大人が少しずつかかわって、生徒を育てていきたい

学校運営協議会委員
**小泉彩子**（さいこ）さん

富士市の地区まちづくりセンターの方から、「富士市立高校の学校運営協議会の委員になりませんか」と声をかけていただき、委員になりました。私の子どもがサッカーをしていたので、富士市立高校のグラウンドには入ったことはありましたが、それ以外では学校にかかわることはありませんでした。「市立高校と言えば、探究」といった声が耳に入ってきたこともありましたが、正直、「探究って何？」という状態でした。そのため、どんな授業を行っている学校なんだろうといった興味はありました。

実際に学校運営協議会に参加してみて、分かったことがいくつかあります。まず、私たち大人は、「どこの大学に何人合格した」といった進学実績だけで高校を見がちですが、その結果に至るまでに、先生方がいろいろな取り組みを熱心に行っていることが分かりました。今まで見えなかったものが見えたような気がして、学校が地域に発信するべきことは、進学実績以上に、学校の中の教育活動なのだと思いました。

授業見学も印象に残っています。高校生が明るく、楽しそうに授業を受けていることは、実際に学校を訪れて、普段の授業の様子を見たからこそ分かったことです。そして、気になっていた「探究」も、発表会に参加して、こういう学びが探究なんだと、私たちの時代にはなかった新しさを感じました。探究は、自分が知っている教科の授業とは全く違うもので、もっと知りたいと思いました。

学校運営協議会には、私のような教育の専門家ではない人も参加していますが、そうした多様な人が集まって学校のあり方について話し合うことで、いつも学校の中で生徒と向き合っている先生方にはないユニークな発想の意見が出てくることもあると思います。学校運営協議会が中心となって、地域の多様な大人たちが普段から生徒に少しずつかかわり、生徒を支える学校や地域になっていけばいいなと思っています。

## 地域連携実践リポート

# 「第22回 人工芝で遊ぼう」

（2023年5月18日開催）

同校では年２回、校内の人工芝グラウンドにおいて、地域の未就園児とその保護者を対象とした交流事業を行っている。スポーツ探究科の２年生とボランティアの生徒（教員志望者、保育士志望者など）が、人工芝を生かした遊びを考案し、遊具の準備から運営までを行う。生徒たちは、子どもたちがけがをしないよう、細心の注意を払いつつ、子どもたちの様子や反応を見ながら遊びの内容を変更するなど、臨機応変に対応。あちこちで子どもたちのはしゃぐ声が響き、笑顔がはじけていた。

「地域の人との交流を通して、社会で役立つコミュニケーション力を身につけたい」と、取り組みへの期待を語る生徒も多かった。

どの遊具でどんな遊びをするのかは、すべて生徒が計画。教師は見守るだけで、まさに生徒が創る地域との交流の場になっていた。

### 保護者の声

上の子の時から、定期的に参加しています。人工芝で遊べる機会はなかなかありませんし、大きいお兄さんやお姉さんに遊んでもらえる経験も貴重だと思います。近年はコロナ禍などもあって、人とのかかわりが薄れてきているように感じます。大きなイベントでなくてもよいので、学校が中心になって、子どもたちが人と接する機会をつくってもらえるとありがたいです。

〈青木千明さん〉

上の子２人が参加して、とても喜んでいたので、今回も参加しました。人工芝なので安全ですし、大きいお兄さんやお姉さんが遊んでくれる機会も少ないので、子どもたちにとってはよい経験になっていると思います。今回は未就園児が対象でしたが、園児や小学生が、縄跳びや鉄棒、自転車の乗り方などを教えてもらえるイベントを企画してもらえるとうれしいです。

〈望月真希（まき）さん〉

富士市の広報紙を見て、このイベントを知りました。人工芝で遊ぶ機会は貴重だと思い、今回初めて参加しました。子どもの様子を見ると、最初は緊張していたようでしたが、高校生が優しく接してくれたので、だんだん楽しめるようになっていったと思います。広くて立派なグラウンドで遊ぶことも新鮮に感じているようでした。私自身も市民として、富士市立高校をより身近に感じられるようになりました。

〈高田恭平さん〉

### 生徒の声

子どもたちと遊んでいると、自分たちが必要とされていると感じられるので、やりがいがあります。この活動を通して、１人でも多くの子どもが、身体を動かす遊びや運動を好きになってくれたらうれしいです。「究タイム」という探究学習の時間に、富士市の魅力や課題について調べていますが、実際に子どもたちと接したことで、さらに富士市を身近に感じられるようになりました。

〈小林晴香さん〉

準備の段階では、自分たちは何をすべきかを考え、みんなでアイデアを出し合いました。小さい子どもたちに楽しんでもらうためには、まず、自分自身が子どもの気持ちに戻って考えることが大切だと思いました。また、今回のような場をつくることで、保護者同士の交流が生まれれば、お母さんたちの負担感を減らすことにもつながります。保護者にとっても意味のあるイベントになっていたらうれしいです。

〈篠原柚葉さん〉

私は部活動では野球部に所属していますが、試合にはいつも、地域の方が子ども連れで応援に来てくれます。自分たちは地域に支えられていると感じる機会が多いので、今回は地域に恩返ししようという気持ちで取り組みました。計画から準備、運営まで、先生の手は借りず、ほぼすべてを生徒たちで行いました。子どもたちにけがをさせないことを第一に考え、どうしたら楽しんでもらえるかという視点で、アイデアを出し合いました。

〈佐藤壮琉（たける）さん〉

## ―実践事例と識者の提言から考える、「働き方改革」のあり方―

# 同僚性を高め、働きやすく、働きがいもある学校に

学び続ける人材の育成や組織的な地域連携などに持続的に取り組んでいくためには、
その中心を担う教師の多忙化を解消し、教師が生き生きと働き続けられる環境をつくることが必要不可欠だ。
「教師協働の授業づくり」を柱とする働き方改革を推進した宮城県角田（かくだ）高校と宮城県教育庁による実践と、
学校や教師のウェルビーイングについて研究する愛媛大学の露口健司教授の提言から、
学校における「働き方改革」のあり方について考える。

宮城県角田高校改革推進チームや宮城県教育庁の担当者、アドバイザーの「先生の幸せ研究所」が、働き方改革の進め方について話し合いを繰り返したほか、校内でも、全教師参加で、効率的で実効性のある評価法をテーマとした対話型ワークショップを実施。

**宮城県角田高校と宮城県教育庁が実践した「働き方改革」**

宮城県教育庁は 2022 年度、経済産業省「未来の教室」実証事業の「教育委員会が学校の伴走者に変わっていくためのプロジェクト型組織変革プログラム」（＊1）に参加。宮城県角田高校を伴走者養成推進校に指定して、実証研究を行った。働き方改革の自走化・仕組み化を目的とし、教育庁は学校の取り組みを支援する立場でかかわった。

## 実践事例　宮城県角田（かくだ）高校と宮城県教育庁の取り組み

## 教師が協働して取り組む授業づくりで、労働生産性と授業の質が高まり、幸福感にもつながる

### 自前主義に切り込み、働き方の質を高める

宮城県角田高校は２０２２年度、宮城県教育庁（以下、県教育庁）や「先生の幸せ研究所」（コラム参照）から支援を受けながら、働き方改革を推進した。校務支援システムの活用などに取り組む中で改革の柱としたのが、「教師協働の授業づくり」だ。その経緯を、同事業を担当した現高校教育課の滝井隆太課長補佐は、次のように語る。

「長時間勤務の是正は必要ですが、それによって生徒が不利益を被るような事態は避けなければなりません。『次期教育振興基本計画について（答申）』で示された、国際的に評価されている日本の教育の質を維持した上で、業務の効率化を進めるべきです。事業準備の段階から教育庁内で議論を重ね、『働き方の質』にもこだわり、教師が仕事から活力を得られるような取り組みを目指して、同校とともに改革を進めま

＊１　同プログラムは、株式会社先生の幸せ研究所が事業者として、「未来の教室」実証事業に採択された。宮城県教育庁のほかに、愛知県名古屋市など、全国７自治体が参加した。

した」

そして、業務の効率化と働き方の質の向上を目指す上で課題として捉えたのが「授業づくり」だった。

「1人の教師が授業づくりにかけられる時間には、限りがあります。一方で、教師は同じ目標に向けて授業をしているはずなのですが、同じような準備を個別に行いがちです。それは効率的ではないと感じていたところ、教師の多忙化の要因の1つとして『自前主義』が挙げられていることを『未来の教室』の調査（＊2）で目のあたりにしました。授業という聖域を取り払って改革しようと考えました」（滝井課長補佐）

宮城県教育庁 高校教育課 教育改革班課長補佐
**滝井隆太**
たきい・りゅうた
22年度の事業推進担当。

宮城県教育庁 教職員課 働き方改革推進チーム課長補佐
**原畑聖子**
はらはた・せいこ
23年度の事業推進担当。

宮城県角田高校 働き方改革推進チームリーダー
**相澤佑典**
あいざわ・ゆうすけ
同校に赴任して3年目。情報部長。国語科。

## 単元計画を持ち回りで作成する中で、同僚性が醸成

「教師協働の授業づくり」は、国語・数学・英語の各教科が、主担当1人と副担当2人から成るチームで取り組んだ。主担当は、育成を目指す資質・能力や生徒の課題などを踏まえて単元目標を設定し、学習内容や評価方法、1コマの授業案などの単元計画を作成。それを副担当と話し合って練り上げた単元計画を基に、3人とも授業を行った。各自が授業を実践する中で気づいた問題は、すぐチーム内で共有して改善。パフォーマンス課題のルーブリックの作成も協働で行い、目標・指導・評価について目線を合わせていった。

主担当は単元ごとに替わる持ち回り制にしたため、単元計画の作成には十分な時間をかけることができた。また、単元計画は次年度に引き継ぎ、他の教師も活用できるようにした。

チームに所属した教師へのアンケートの結果からは、単元目標の達成に向けて、問いを練り上げたり、授業内の時間配分を見直したりするなど、生徒中心で進歩的・積極的な指導観が浸透していることが分かった。そして、生徒へのアンケートでは、授業の満足度が向上する結果が得られた。これまでの勤務時間の範囲内で、教師の資質・能力と授業の質の両方を高めることができたのだ。

角田高校で同事業のリーダーを務めた相澤佑典先生は、改革の中で得た手応えを次のように語る。

「単元計画の作成過程では、先生方から、自分にはなかった教材の見方や指導の考え方を知ることができ、自身の指導の幅が広がりました。何より、先生方と生徒や授業、指導観について語り合う時間はとても楽しく、教師としての幸せを感じました。協働して授業をつくることに不慣れでしたので、単元計画の作成には時間がかかりましたが、慣れればもっと早くでき、業務の効率化にもつながると確信しています」

労働生産性の向上という成果を受けて、県教育庁は23年度、角田高校を含む7校を推進校に指定。「働き方の質」と「教育の質」の向上を目指し、「長時間勤務の縮減」と働きがいにつながる「ワーク・エンゲイジメント（＊3）の向上」を目標に改革を推進している。教職員課の原畑聖子課長補佐は、今後の展望を次のように語る。

「昨年度の取り組みを引き継いで、長時間勤務の縮減を中心とした働きやすい環境づくりを確実に進める一方で、働き方の質も改善し、子どもたちの『憧れの職業』となる教師像を再生させたいと考えています」

**アドバイザーから**

### 同僚と目指す学校像を語り合おう

**株式会社先生の幸せ研究所**
**代表取締役 澤田真由美**

働き方改革は、ともすれば時間を生み出すことのみが焦点化されますが、大切なのは、限られた時間の中で業務の質を上げることであり、先生方が「本当によいと思うこと」を実現することにほかなりません。

学校によって、課題や目指すことは異なります。そのため、先生方が対話し、納得解を出すことが重要になります。自校の課題は何か、それをどのように改善したいのかを考えてみましょう。一緒に考える仲間として、外部機関や教育委員会をうまく頼ってほしいと思います。

角田高校は、教育の本丸である「授業をよくしたい」ということに、先生たち自らが取り組み、納得解をつくっていきました。そして、その過程で同僚性が高まり、働きやすい環境がつくられました。対話の風土がある学校、対話できる雰囲気を醸成できた学校は、改革が成功するはずです。

＊2 経済産業省教育産業室、「未来の教室」と EdTech 研究会「EdTech を活用した学校現場の業務改善等検討事業　学校等 BPR 調査報告と EdTech を用いた解決策の提案について」。　＊3 オランダ・ユトレヒト大学のシャウフェリ教授らが提唱した概念であり、「仕事から活力を得て生き生きとしている」（活力）、「仕事に誇りとやりがいを感じている」（熱意）、「仕事に熱心に取り組んでいる」（没頭）の3つがそろった状態として定義される。

識者の提言

愛媛大学 教授 露口健司

# 「働きやすさ」と「働きがい」の鍵は、生徒や同僚、管理職、保護者との信頼関係

## 労働環境と組織の視点から職場を見直す

学校組織について研究する露口健司教授は、教師のウェルビーイングの実現に向けて、「働きがい改革」を提唱している（図1）。生き生きと働くことができる環境づくりには、健康・安全・福利厚生などの「働きやすさ」の視点が重要だが、高度専門職業人である教師には、仕事に誇りと熱意を持ち、仕事を通じて充実感や成長実感を得る「働きがい」の視点も欠かせないと語る。

そして、その2つを両立するために必要なのが、生徒、同僚、管理職、保護者との信頼関係だ。

「教師としての働きがいは、生徒の成長を感じてこそ得られるものであり、生徒を支援するためには、生徒からの信頼が欠かせません。同僚や管理職との信頼関係も重要で、一緒に汗を流し、皆で達成感を味わったり、互いの仕事を認め合ったりすることで、充実感や成長実感が得られます」

学校行事の精選やICTの活用などは、業務効率化の有効な手立ての1つだが、各ステークホルダーとの信頼関係の構築もまた、業務の効率化につながる。同僚との信頼関係があれば、仕事を分担しやすかったり、休暇を取りやすかったりと、より働きやすい職場になる。また、保護者から信頼されていれば、学校への過度な要求などは少なくなるだろう。

「角田高校（P.28～29）では、授業づくりを通じて先生方が深く交流し、信頼し合える関係になったことが、働きやすさに結びついているように思われます。同じ目標に向かって力を合わせていく中で、知識や指導法、アイデアなどの共有が起こり、周りが困っていたら助けよう、自分が困っていたら助けてくれるだろうという互助関係が生まれます。そうして、働きやすく、働きがいのある職場が築かれていくのです」

## 一律の時短ではなく、多様な働き方ができる職場へ

近年の調査で、同僚との信頼関係やワーク・エンゲイジメントが高ければ幸福感も高いことが、また、長時間勤務でなければ幸福感が高いとは限らないことが分かった（図2）。

「教師という職業に問題があるのではなく、『どこで働くか』や『誰と働くか』が問題なのです。つまり、職場の環境づくりが重要であり、その責任を担う管理職のマネジメントが、働きがい改革の鍵になると考えています」

働きがい改革の出発点となるのはアセスメントだ。教師一人ひとりがどんな仕事を担当し、何に働きがいや負担を感じているのかを把握する校内研修などを実施する。そして、教師が働きがいを感じている教育活動を尊重しながら、負担感のある業務を効率化していく（＊4）。その際は、教師間の信頼関係を保ちながら、業務内容を見直したり、精選したりすることが重要だ。

「先生方が持っている資質・能力は一人ひとりで異なり、やりがいを感じる点や働き方に対する価値観、家庭環境なども違います。教師全員に対して画一的に対処するのではなく、多様な働き方を認め、それを実現する環境を整えていきましょう」

愛媛大学大学院教育学研究科 教授
**露口健司**
つゆぐち・けんじ　主な研究テーマは、学校組織のリーダーシップ、学校組織のウェル・ビーイングとワーク・エンゲイジメントなど。国立教育政策研究所客員研究員、日本教職大学院協会編集委員会座長等も務める。著書に、『子供の学力とウェルビーイングを高める教育長のリーダーシップ』（共著、学事出版）、『ソーシャル・キャピタルで解く教育問題』（ジダイ社）など。


**「教師が生き生きと働き続けられる環境づくり」のために、学校はどのような実践をしていけばよいのか――。**

8月号以降も、本コーナーに登場いただいた露口教授に引き続きご協力いただき、働き方改革をテーマとした新連載を予定しています。ご期待ください！

＊4 働きがい改革に関する校内研修の方法は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』の『VIEW next』教育委員版 2022年度 Vol.3（P.5～8）でご覧いただけます。https://view-next.benesse.jp/view/bkn-board/article13101/ または右の2次元コードからアクセスしてください。

## 図1 「働き方改革」と「働きがい改革」の違い

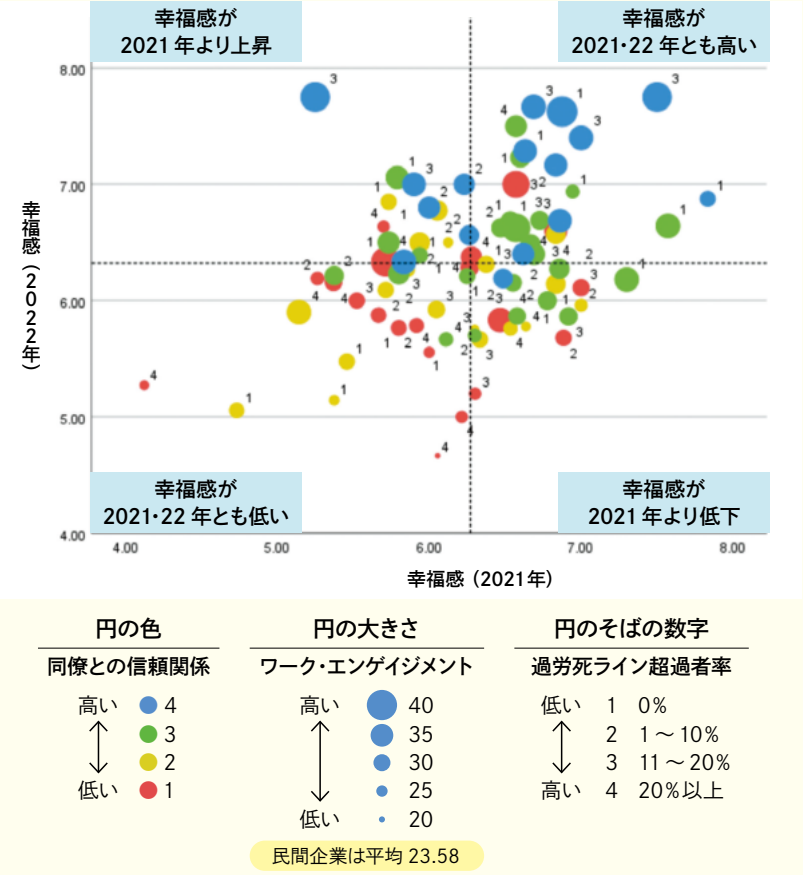
| 働き方改革の価値（働きやすさ） | 働きがい改革の価値（働きがい） |
|---|---|
| 時間短縮重視 | **ワーク・エンゲイジメント**重視 |
| 上限を超えないことを重視 | 家庭生活を含めた**ウェル・ビーイング**重視 |
| 原則、キャリアを問わず一律 | キャリアに応じて**弾力的** |
| 働き方は管理職が定める | 働き方は教師が**主体的に**考える（自律的専門職） |
| ルールを定める | ルールは**最小限** |
| 労働者としての教師像 | **高度専門職**としての教師像 |
| 教師の意識改革に責任を帰属 | **管理職のマネジメント**に責任を帰属 |
| 業務の量的縮減を目指す | 業務の**質的改善**を目指す |
| ワーク・ライフ・バランス | **ワーク・アズ・ライフ**（＊5） |
| 信頼の優先順位が低い | 信頼の優先順位が**高い** |
| 自分の幸せ | **子どもやほかの人々**の幸せ |
| 今の自分を楽にする | **未来**の自分を楽にする |
| 仕事を減らす | 仕事を**面白く**する |

※露口教授の提供資料を基に編集部で作成。

**図1**は、「働き方改革」と「働きがい改革」の違いを整理したものだ。教師の勤務時間があまりにも長いことがクローズアップされてきたため、働き方改革というと、時間外勤務の削減に重きが置かれる傾向がある。しかし、教師が高度専門職業人であることを踏まえると、「管理を強化するのではなく、ルールを最小限にして、主体性を重視する働き方がふさわしい」と、露口教授は指摘する。

また、「働きやすさ」と「働きがい」の両立には、生徒や同僚らとの信頼関係が重要となるが、その醸成には一定の時間が必要だ。その点からも、勤務時間の削減ありきではなく、信頼醸成によって「働きがい」を高める工夫と努力が求められていると言えるだろう。

## 図2 同僚との信頼関係、ワーク・エンゲイジメント、長時間勤務と、幸福感との関係




同僚との信頼関係、ワーク・エンゲイジメント、過労死ライン超過者率は、2022年の調査結果。
※露口教授の提供資料を基に編集部で作成。

**図2**は、A県の教師を対象に、2021年と2022年に実施した、信頼関係などと幸福感の関係についての調査結果だ。教師に「直近1か月間の幸せの状況」を10点満点で回答してもらい、学校ごとに集計した平均点をプロットした。

同僚との信頼関係は、度合いに応じて円を4色に分けた。信頼関係が強いことを示す青色の円は、2022年の幸福感が7.00～8.00の間に集中している。同僚との信頼関係が強い学校は、幸福感の水準が高いと言える。

また、ワーク・エンゲイジメント（働きがい）が高い場合は大きな円としたが、同僚との信頼関係と同様に、大きな円はグラフの上部に多い。ワーク・エンゲイジメントが高いと、幸福感も高いことを示している。

そして、過労死ライン超過者率が低い「1」の学校は、幸福感が低い5.00～6.00の間にも、幸福感が高い7.00～8.00の間にもある。長時間勤務でなければ、幸福感が高いというわけではないことが、このグラフから見て取れる。

＊5 筑波大学の落合陽一准教授が提唱した、ワーク（仕事）とライフ（プライベート）を分けずに、両方に価値を置き、人生全体を充実させていくこと。

# 生徒一人ひとりの「学びたい！」があふれ出す未来の教育を、先生方とともに創り出す

## これからの学校のために私たちができること——

株式会社ベネッセコーポレーション 学校カンパニー長
田村隆憲

### 大きな変革が求められている学校現場とともに歩み続けたい

私たちは、変化が激しく、少し先の未来も予測できない社会を生きています。ここ数年を振り返っても、コロナ禍やロシアによるウクライナ侵攻、AI技術の飛躍的な進歩など、予見していなかった出来事が相次いで起こりました。そうした社会の変化の速度は、生徒が社会に出る頃には一層加速しているものと思われます。

変化の激しい社会では、未知の状況に対応できる思考力や判断力に加え、知識や技能を更新するために必要な学び続ける力などが求められます。それらの資質・能力の必要性は新学習指導要領にも示されており、学校現場を支える先生方への周知もかなり進んでいると感じます。

そうした社会状況を背景として、学校現場ではかつてないほどの変革が求められています。多様な資質・能力の発揮や育成につながる探究学習が、教科学習でも重視されるとともに、生徒一人ひとりの資質・能力を見取るために、学習評価の充実も求められています。これからの学習評価では、「何を学び、何ができるようになったか」を、教師だけではなく、生徒自身も認識し、それを次の目標や学びにつなげられるようにすることが必要とされているのです。

そのような変化と同期する形で、大学入試も変わりつつあります。高校生活を通じて培った資質・能力などを多面的・総合的に評価する、総合型選抜や学校推薦型選抜の実施割合は年々

高まっており、これまでとは異なる入試対応が学校現場に求められています。

## 現場の声を基に、支援のあり方を考える

生徒一人ひとりの資質・能力を認めて、その伸長を支える教育は、個々の可能性を広げやすいよさがあると思います。その半面、そうした資質・能力は一律のテストでは測定できず、個々の姿を丁寧に見取った上で、個別の課題を基に、指導や支援のあり方・方法を検討する必要があるため、教師の負担が増していく可能性があるでしょう。働き方改革は進みつつあるものの、対応し切れないといった声もよく聞かれます。

また、生徒の学習意欲や学習力が低下傾向にあることが、様々な調査で明らかになっています。外発的な動機づけと内発的な動機づけの両面から生徒の学びをいかに支えるかということも、今後一層課題となっていくものと考えられます。

ベネッセは長年にわたり、先生方や生徒、そして保護者が今、何に困っているのか、現場の声に耳を傾けてサービスを生み出し、磨き続けてきました。その出発点には、生徒一人ひとりが「学びたい」「学び続けよう」と、より主体的な姿や行動へと変容するきっかけを提供したいという思いがあります。そのため、次の目標に向けた具体的な一歩につなげることを何よりも大切にし、教育現場の状況も踏まえた各種サービスの改善にも取り組んでいます（右図）。

一例を挙げると、到達度型テストであるスタディーサポート及び進路マップの基礎力診断テストは、２０２３年度から一部をＣＢＴ（＊）化して、テスト結果の即時返却を実現しました。実際に導入された学校を見学すると、生徒はテスト結果に基づいて自主的に次の目標を考え、その姿を見た先生方は大変喜ばれていました。

情報発信による支援も一層の強化を図っています。教育課題が多様化し、分掌や立場によって直面している課題が異なる状況を受けて、各先生が必要な情報を、必要な時に入手できるように努めていきます。例えば、今号で創刊４００号を迎えた本誌『ＶＩＥＷｎｅｘｔ』高校版は、今後も学校現場の課題の本質を捉え、これからの高校教育のあり方を考えていくとともに、より読みやすく、活用していただける媒体となるよう、誌面を大きく変革しました。次号以降も、ぜひご期待ください。

## 日本の教育への責任を自覚してサービスを磨き、成長を続ける

最後に私自身のお話をさせていただくと、入社してから長年にわたって学校担当として、数え切れないほどの先生方と対話を重ね、生徒の成長を支える先生方のご指導をご支援させていただき、多くの喜びを分かち合ってまいりました。そうした経験が、先生方とともに未来の明るい教育を形づくりたいという思いの原点にあります。これからも一層全国の学校や先生方の頼りにしていただけるよう、ベネッセは日本の教育に対しての責任を自覚してサービスを磨き、成長を続けてまいります。

### 生徒の行動変容と主体的に学ぶ高校３年間の実現を支援するために、私たちがご提供するサービス

**進研模試**

新学習指導要領に対応した入試に向け、2023 年度は2年生の模試において、変化の大きい地理歴史・公民や、大学入学共通テストの新設教科である情報を出題します。生徒の理解度や定着度に不安をお持ちの先生方が多い状況を踏まえ、より正確な測定、評価をご提供してまいります。

**スタディーサポート、進路マップ**

スタディーサポートと進路マップの基礎力診断テストはこれまで、テスト結果の返却に２週間程度のお時間をいただいておりましたが、2023 年度より、一部を CBT 化し、結果の即時返却を実現。即時にテスト結果を確認できることは、生徒の行動変容に大きな効果が期待できます。

**Classi**

進研模試やスタディーサポートなどのアセスメントとの連携の強化により、測定（評価）と学習が一層つながりやすくなります。さらに、個に応じた学びをより深められるよう、サービスを改善してまいります。

**進路達成プログラム、Compass**

学校推薦型・総合型選抜の拡大により、大学入試が生徒の学習のモチベーションにならなくなりつつあります。目標設定の困難さや指導負荷の増加も課題です。そこで、マナビジョンにおいて、「進路達成プログラム」というサービスを展開し、生徒が進路を「自分事」にし、主体的に進路を決定できるサポートを開始しました。Compass も、学校推薦型・総合型選抜にご活用いただけるよう、強化を図ります。

**GTEC**

英語４技能や情報活用能力、探究的な学びの姿勢などは、入試方式を問わず、未来を生きる生徒に身につけてほしい資質・能力です。スコア型英語４技能検定の GTEC を始め、授業活用から入試活用まで、先生方のご指導に寄り添えるテスト・教材を提供し続けます。

**たむら・たかのり**　1997 年ベネッセコーポレーション入社。中四国地方や首都圏の学校担当を経て、進研アド社長、高校営業本部長などを歴任。2022 年1月より現職。

＊ Computer Based Testing の略。コンピューター上で実施する試験。